

## 魏志倭人伝(3)

山下 浩

本稿は、「魏志倭人伝(2)」からの続きである。

### 瀬戸内の戦い

南九州勢の王、帥升は、北部九州の豊かな大地を手に入れることができた。

しかしそのために、和国内の自由貿易を修復不能なまでに破壊してしまった。自由貿易によって得られる利益も戦争の目的に含まれていたもので、当てが外れた。

次の政策目標は、支配地域内外の経済の活発化、経済的豊かさの構築となった。そのため、自由な交易を阻害する要因の排除に努めた。しかし、外交努力は実を結ばず、新たな方針を検討した。自由貿易を阻害する勢力は倒さなければならないと。そして、新たな戦争が始まった。

弥生中期、九州勢は瀬戸内を海路東上し、中国地方の諸国および瀬戸内島嶼部への侵攻を開始した。海路としたのは、『魏志倭人伝』のつま国、いき国、まつら国のくだりに見られるように、当時の陸路はほとんど未発達で、多くの兵士が行軍するには不便であったろうと思われるからである。それと、遠隔地からの侵攻に対処するためとみられる高地性集落がこの時期、瀬戸内海沿岸や島嶼に多くみられることも理由に挙げられる。この地域を東進し、そして戦場になったのだ。

九州勢の武器の多くは鉄製品だった。反対に侵略される国々は鉄剣や鉄鏃の装備が相対的に見劣りしていた。ほとんど無かったと言っている。また、弥生時代中期は諸国間の関係が安定し、平和が保たれていたもので、九州の周辺諸国は自国内の治安維持のための必要最小限度の軍備しか保持していなかったと思われる。大陸から伝わった銅矛、銅戈、銅剣は弥生時代中期から後期になるにつれて大型化が進み、武器として使用できないものへと変質し、宗教祭器となっていた。戦争の脅威もその流れを食い止めることがなかった。武器として使用可能な量の銅剣の製造には、それに応じた量の原材料が必要であり、集落の戦闘員の大多数に配布できる量を確保できなかったのだろう。しかしながら、細形銅剣は鉄剣に比べると性能が見劣りするものの、石斧などとは比べ物にならない。それにもかかわらず、武器として使用可能な細形銅剣を弥生時代後期になって再び製造しようとした痕跡を残す遺跡などの発掘例がない。銅剣、銅矛などは戦争の脅威に関係なく、宗教祭器として大型化が進んでいった。

弥生時代の武器は投射武器(弓矢、投石、投弾など)、衝撃武器(斧、剣、矛、棍棒など)、それに木製の盾、甲<sup>よろい</sup>などの防具が基本であった。戦場ではおそらく、木製の甲を身に着け、立ち木や岩などの物陰、そういった自然物のないところでは木製の盾などに身を隠し、敵に弓矢で射掛けた後接近戦で斧や剣、棍棒などで戦ったのだろう。弥生時代中期後半以降、木製の甲<sup>よろい</sup>や置き盾の出土例が増加することからみて、本格的な野戦に対応した戦闘集団の組織化が進み、戦術や戦闘の方法は、特に九州勢においては、多くの戦闘経験の蓄積により、より洗練されたものになったものと推測される。弓矢での戦いでは石鏃と鉄鏃の性能の差はみられないかもしれないが、接近戦での旧来の石斧や石剣、棍棒などと九州勢の鉄剣とでは、集団戦においてはその差は明らかであったろう。今の山口県や四国の瀬戸内沿岸の国々は、北部九州の異変を受けて国交を絶つとともに戦争に備えたのだろうが、十分な戦力を蓄えた九州勢と和睦するか、または戦に敗れ、降伏していった。九州勢の侵攻は、戦争当事者以外のその周辺の国々との軋轢を次々と生んでいった。西瀬戸内地方での九州勢の侵略と勝利、その強さは、中部瀬戸内、大阪湾岸へと伝わり、九州勢への備えが各地で行われた。おそらく、西瀬戸内地方で環濠集落は十分な防御力を発揮できず、敗れていったのだろう。各地の集落はより強力な防衛能力が必要とされ、西方からの攻撃に備えた高地に集落を移していった(高地性集落の発生)。狼煙の跡も見られることから、各集落間で狼煙による通信も行った。

環濠集落の環濠と土塁の関係は、通常は環濠の外側に掘った土を盛った土塁がある、というものだった。集落の内部と外部を区分する環濠を築造する目的は、外敵や獣などから集落を守る防御機能が考えられている。

中世、戦国時代の城を見ると、城を囲う堀の内側に高い城壁を設けて敵の侵入を防ぎ、敵兵を城壁にあけた小窓から攻撃するようにできているが、環濠集落の土塁は環濠の外側に設けられており、敵兵は土

壘上から胸から下を土塁で隠したうえで、集落に向かって住民を見下ろす形で矢を射かけることができるものだった。果たしてこれを防御施設といえるのかと疑問がわくような構造になっている。おそらく環濠集落の環濠の設置目的は、野生動物と泥棒の侵入を防ぐ程度のものであったのだろう。土塁が環濠の内側に設けられた場合、集落からは環濠やその外側の状況が見えないので、泥棒が環濠を越えて土塁の向こう側に潜んでいても発見が難しい。環濠の設備は、たとえ侵入者があったとしても集落から容易に発見できる構造になっていたのだ。言い換えると、環濠集落は地域が平和で、他国から侵略される恐れがない社会が前提となっており、治安を維持することを目的とする施設だった。

これに対して、愛知県の朝日遺跡は、弥生時代中期前半に集落の外側に大濠をめぐらせて、その土で内側に土塁を築いていたが、これは戦時体制が前提になっている。中期後半に北居住域を囲むように3~4条の環濠が巡り、谷にかかる部分には柵・逆茂木・乱杭などの強固なバリケードが設けられた。柵は2列で、下部に逆茂木が伴う厳重な構造であるが、中期後葉に崩壊した。その後の集落の変化を見ると、おそらく戦争に負けたのであろう。竪穴建物は円形が消滅してすべて方形・長方形・胴張り長方形になる。方形周溝墓は四隅切れが消滅して一カ所切れとなり、周溝には供献土器以外の物品廃棄が見られる。とりわけ、特徴的なのが東墓域に人々が住み始めただけでなく、それ以前の方形周溝墓を無視して新たに方形周溝墓を造営する点であり、ここに朝日遺跡の歴史的な終焉をみることができる。戦争に備えた環濠集落とは朝日遺跡のようなものでなければならない。西日本に見られる環濠の外側に土塁を設ける環濠集落は、戦争を前提にしないものであったのだ。(参考資料: ウィキペディア「朝日遺跡」)

そうはいても、地域社会の治安状況により、先ほどみた吉野ヶ里遺跡もそうであるが、環濠の設備は必要に応じて物見櫓・柵・逆茂木・乱杭などが設けられるなど工夫、対応がされていた。

ほとんどの環濠集落は平時の、治安が保たれている時代のものであった。戦時においては城や砦などとして利用できるものではなかった。そのため、九州勢からの攻撃に対しては、地の利を生かして野戦で敵に挑んだのではないかと思われる。野戦であれば、投射武器の利用では山や川など地形の有利な位置に布陣し、自然の木々や岩を盾にして互角に戦うことができただろう。野戦に敗れば環濠集落は丸裸同然であった。九州勢が侵攻してくるという情報を得た集落は、迎え撃つための準備とともに、非戦闘員を逃がすために高地性集落を築いたものと思われる。この時期の環濠集落の遺跡は、環濠が埋め戻されたものはあるが、集落自体が戦場になったと思われる、焼けた木材や生活用具が発掘される例は少ない。また、日本中が戦場になった戦国時代もそうであるが、野戦の戦争遺跡は発掘されることがほとんどない。戦場の死体は土に還り、戦死者の武器、武具は回収、略奪、あるいは廃棄された。石垣や濠などが築かれなければ、戦場には長期にわたって残るものがない。そのため、これからみていく九州勢の東進の軌跡は、残念ながらこうした戦争遺跡を欠いたものである。一言断っておく。

戦争はゆっくりと、しかし確実にその戦線を東へ、東へと移していった。

先に見たように、朝鮮半島との交易の中継地として重要な位置にある対馬、壱岐も、奴国征服と時期をたがえず領土とした。

こうして、九州勢は和国乱の始まる前、すなわち、霊帝即位の168年よりも前の160年ごろまでに、瀬戸内の山陽、島嶼、四国沿岸から大阪湾岸までを支配下、あるいは和議によって勢力下に置いた。それは、奴国が征服されたであろう105年ごろから和国乱の始まる160年ごろまでの、だいたい55年くらいの期間である。和国乱がいつ始まったかわからないが、とりあえず160年ごろとしておよその期間を出してみた。あくまでも参考である。これは中世の戦国時代の信長(桶狭間の戦い 1560年)から家康(大坂夏の陣 1615年)までの期間とほぼ同じくらいの年数であるが、これは、瀬戸内海沿岸部の国を従えた後、そこを起点に内陸の国々に攻め込み、一步一步、芽を出した種が四方へ根を張っていくように、内陸部へと支配地を拡大していったからではなからうか。おそらく、戦国時代と比べ、軍隊の規模、武器、陸路・海路の整備状況や、この当時はまだ馬が日本列島におらず、兵站を担う輸送手段などが後の時代よりも劣っていることから、占領地の安定化と戦力化を図りながら国を拡大していったのだ。また、山陽、島嶼などの占領地や九州での反乱、武装蜂起にも対処しただろう。こうした、国家の統治機構の整備を進めながらの東進であった。九州勢の王と家臣、その一族は前線またはその後方の拠点で軍の指揮を執り、移動していったはずである。これは『古事記』、『日本書紀』の神武東征の内容からも言えることであり、それにより、女王国にみられた地方に官と鄙守を置いて地方を統括する方式が生まれ、発達した。いと国のように王がいる国もあった。九州勢の侵攻に、抵抗せず九州勢に積極的に加わった国もあったのだろう。後ほど具体的に見ていくが、伊予国と吉備国は戦争があったような様子が見られないので、交渉によ

り和睦したのだらう。彼らは九州勢の王、帥升に臣従することを条件に臣下に加えてもらった。帥升らの去った九州は全域が九州勢にとって地方となり、国の統治機構本体は戦線の移動とともに東へ移っていった。弥生時代中期から後期にかけての55年くらいの期間という、当然のことであるが、東進を指揮する王の死去などで、指導者の交代が行われたであろう。

『古事記』、『日本書紀』の神武東征の経路は、九州を発った後、安芸国埃宮、吉備国、浪速国、河内国、紀伊国、熊野と進み、大和の地に入っている。登場人物やストーリーの多くはフィクションであろうが、東征の経路については事実に基づく言い伝えによって書かれていると考えられるので、『古事記』、『日本書紀』の経路に沿って各地の遺跡の状況を見ていこう。

## 山口県の遺跡の状況

九州勢が東進した弥生時代中期、山口県の瀬戸内沿岸部に多くの高地性集落が築かれた。宇部市の北迫遺跡、周南市の老郷地遺跡、周防大島の丸山遺跡、鷲ノ巢の遺跡（遺跡に名称はつけられていない）、日良居字沓松の遺跡（同上）などである。同時期、山口市に亀山遺跡、萩峠遺跡、朝田墳墓群中の第Ⅱ地区の遺跡（名称なし）などが築かれている。（参考資料：日本の古代遺跡 30 山口 小野忠熙著 保育社）九州勢の東進は山口県の瀬戸内沿岸部、周防国への攻撃で始まり、沿岸部から内陸部へと攻撃されていった。

それでは、高地性集落の状況を、周南市の天王遺跡を例にとってみてみよう。

昭和24（1949）年山口県東部、周南市熊毛地区を流れる島田川中流域の三丘盆地北縁にあたる天王台地（熊毛地区）において数多くの弥生土器が出土した。

この天王遺跡は、標高48m、麓からの比高約30mの高所にある。丘陵末端の三方は急斜面をなしており、丘陵上からの視野は広くて展望に恵まれた要害の地を占めている。

調査の結果、弥生時代中期を主体とする住居跡および貯蔵穴群や箱式石棺群などとともに、巨大な溝が確認された。幅6m、深さ3m、断面V字形の大溝が、約50mにわたって東西に走り、ムラの北端を画していた。

このようにこの遺跡は、高所への立地とともに自然の険しい地形を生かし、かつ人工的な防御施設を構築した要害のムラ、高地性環濠集落であったとみなすことができよう。

（参考資料：図説山口県の歴史 八木充 河出書房新社）

後期終末期には、弥生時代中期に続いて、北迫遺跡、老郷地遺跡、丸山遺跡、鷲ノ巢の遺跡（名称なし）、日良居字沓松の遺跡（同上）などに再び高地性集落が築かれ、周南市熊毛地区の吹越遺跡、松尾遺跡、下松市の御屋敷山遺跡、清水遺跡（玖珂郡玖珂町 標高98m、比高約40m）なども新たに築かれた。（参考資料：日本の古代遺跡 30 山口 小野忠熙著 保育社）

こうした高地性集落が多く営まれたのは、弥生時代中期後半から後期にかけてであるが、その出現は少なくとも前期後半にまでさかのぼる。詳細な調査が行われていないものも多いが、県内でも堂ノ尾遺跡（下関市）、大日遺跡（美祢市秋芳町）、中郷遺跡（山口市小郡）、井上山遺跡（防府市）、高原遺跡（下松市）など、丘陵性の高地性集落が、前期後半から末の時代には出現している。そしてほぼ同時期に、城山遺跡（下関市豊浦町）、引野遺跡（山口市阿知須）など、山稜性の高地性集落も成立している。（参考資料：図説山口県の歴史 八木充 河出書房新社）

弥生時代前期後半に出現した高地性集落は防御的な集落というよりは、狩猟採集などを生業とする人々が高地に築いた集落、いわゆる「山住みの集落」ではないかと思われる。それに対し、中期後半から次々に出現する高地性集落は外敵からの攻撃に反撃し、あるいは逃れることを目的としたものであった。後期終末期に設けられた遺跡は、鏃などの出土例が少ないので、戦いのための施設とはいえず、その時代に強まった征服者からの耐えがたい抑圧、収奪、徴兵などから逃れることを目的にしたものであろう。背景として、「倭国乱」と称される近畿地方での激しい戦争に対する物資の苛烈な収奪、兵員の補充のための徴兵などが考えられる。このように、高地性集落築造の目的は、その時代により大きく変化していった。なお、山口県の日本海側（長門国）には戦争に備えた高地性集落、および支配者の抑圧、収奪等から逃れるためと思われる高地性集落などが見られず、九州勢の日本海側への侵攻は、当初は行われなかったと判断している。

## 広島県の遺跡の状況

### 西山遺跡と豊谷遺跡

広島湾や太田川下流域一帯を見渡せる茶磨山（標高 61m）<sup>ちやま</sup> 山上には、弥生時代後期の高地性集落の西山遺跡がある。頂上付近の三カ所と南東に伸びる尾根上の二カ所の計五カ所で貝塚が確認されている。1964 年の調査で二層の貝層と後期の土器、鉄製工具などが発見されたが、そのほかに銅鏃や丁子頭の土製勾玉、多量の鉄器、石器類が確認されており、周辺地域ではもっとも豊富な遺物を含むことで知られている。なお、その後の調査で貝層の上手から隅丸方形の住居跡が確認されている。

温品川を北上すると、標高約 110m の丘陵尾根上に弥生後期の高地性集落、豊谷遺跡がある。竪穴住居跡 13 軒、土壇 19 基、壺棺墓 1 基、小貝塚 3 カ所が明らかになったが、一時期では、竪穴住居 2、3 軒に貝塚 1 カ所、土壇 2、3 基をともなうグループが 3 カ所に分散し、互いに関係しあって一つの集落を構成していることが明らかになった。

このほか広島湾一帯には、太田川を見下ろす標高 50～75m の尾根上に後期の竪穴住居 13 軒、住居跡状遺構 2、土壇 25 基などが検出された恵下山遺跡群<sup>えげやま</sup>、それに連なる恵下、寺迫、北山など多くの高地性集落が見られる。これらの高地性集落はいずれも弥生時代後期のもので、集落の在り方は山城のような外敵の侵入に備えるというものではなく、低地のものとあまり変わらないものだった。この地域には多くの高地性集落があり、そこに住む人々がみんな狩猟採集を業としていたとは考えにくく、山口県の遺跡の状況と同様に、それらは征服者からの耐えがたい抑圧等から逃れるためのものだったのではなかろうか。

これらのことから、次のように考えられる。

九州勢が東進した弥生時代中期の遺跡は、縄文晩期から弥生時代後期まで続く中山貝塚以外にこの地方に見られない。九州勢に広島県（安芸国）の集落が激しく抵抗したような遺跡や証拠がないのだ。当時広島湾の大半は海で、現在の比治山、黄金山、江波山、元宇品などが湾内に島として浮かんでおり、おそらく、沿岸部の人口が少なく、高地性集落を築く間もなく征服されてしまったのではなかろうか。弥生時代後期になると、高地性集落の状況にみられるように、山口県と同様に安芸国も九州勢に苛烈な収奪、抑圧を受け、支配者が立ち入るのに不便な高地へ集落ごと逃げ込んだのだろう。（参考資料：日本の古代遺跡 26 広島 脇坂光彦、小郡隆共著 保育社）

九州勢の東進は、山口県の瀬戸内沿岸部、周防国から始まり、次に東進して広島県西部の安芸国へと進出したのだろう。『古事記』には「阿岐国の多祁理宮に七年坐しき」とあり、安芸、周防二カ国の戦後統治と東の吉備国との交渉を広島湾岸のどこかに集落を築き、そこを拠点に行ったのではなかろうか。

広島県の遺跡の状況をみるにあたって、前提としなければならないのは、古代において広島県東部は備後国として吉備国に属し、西部の安芸国とは別の国だったということだ。吉備国の一部だった広島県東部の遺跡をみていく。

### 大宮遺跡（福山市神辺町大字湯野）

大宮遺跡は、以前から弥生土器が散布していたことで知られていて、昭和 53（1978）年から圃場整備事業に伴い発掘調査された。北の丘陵から流れ出る芦田川支流の深水川<sup>ふかみ</sup>がこの当りで西側に曲る所に形成された自然堤防上の微高地に造営されたもので遺跡の範囲は概ね東西 500m、南北 800m。中央部は奈良時代の条里制施行時に削られていて遺構の残存状態は悪く、北西部に多く遺構が見られる。遺跡からは、3 本の溝に囲まれた弥生前・中期の環濠集落跡、南側では、古墳時代後期の掘立柱群が見つかった。この環濠のすぐ南では、古墳時代後期六世紀後半の掘立柱や建物 30 数棟が見つかった。中央部には、東西 27m、南北 20～28m の長さの溝に囲まれた方形の敷地に建てられた床面積 30 m<sup>2</sup> の建物跡が見ついている。これは支配者層の館跡と思われる。弥生時代のものと思われる貯蔵穴もあった。

遺跡の最も内側を囲んでいた環濠は幅 3m、深さ 1.2m で陸橋状の施設があった。内部の土を観察すると、濠の内外から多くの土が流れ込んでいるが、内側からのものが多く、内側に接して土塁があったものと思われる。これは多くの環濠集落に見られる環濠の「外側」に土塁を設ける様式と反対の構造になって

おり、集落の治安のためでなく、外敵から集落を防御する戦時の施設であった。集落と外部とは、濠と土塁により完全に遮断していた。この環濠は前期中頃に嵩上げされ、前期後半にはその機能が停止したことが確かめられている。環濠の外側には、この環濠の機能が停止するころから中期前半にかけ、北側に広がる低湿地からつながる溝、およびそれから分かれた溝が新たに掘られている。これらは幅 4~4.5m、深さ 1.7m以上の大規模なもので、溝底にはさらに小さい溝が掘られ、流水があったことが知られ、低湿地の水の調整を目的としたものであろうことが推定されている。

つまり、大宮遺跡においては、前期の環濠は明らかに戦時の集落の防御を目的としたものであったのに対し、それが埋没したあとには、その外側に農業用水的な溝を掘っており、中期には北側の低湿地を利用した水田経営が安定してきたものと考えられる。しかし、これらの溝が埋没した中期後半以降については明らかでない。

大宮遺跡の西約 3 kmには亀山遺跡がある。この遺跡は弥生時代前期の環濠集落を始めとし、中期から後期の住居跡、2 基の中期古墳、平安時代の祭祀遺跡などが明らかになった。

弥生時代前期の環濠集落は、東西 150m、南北 200m、比高約 20mの独立丘陵上にある集落を 3 重の環濠で画したものである。現在のところ、環濠内に住居跡は確認されていないが、集落を囲む壕であったことは疑いない。これら 3 本の壕は、幅 1.5~2.5m、深さ 1~1.5mで外敵を強く意識したことが窺われる。

壕内からは前期土器のみが出土し、前期末にはほとんど埋没して、環濠としての機能を終えている。壕が埋没したあとの中期中葉には集落はいったん途絶えるが、中期後半からは、壕をもたない集落として再生するようである。

このように、大宮遺跡と亀山遺跡とでは、立地、濠の構造、使用期間などに若干の相違は見られたものの、前期中葉には高屋川の沖積地に大規模な環濠集落を形成し、前期末には消滅、移動しているという点で一致している。

(参考資料：日本の古代遺跡 26 広島 脇坂光彦、小郡隆共著 保育社、<http://bingo-history.net/archives/15908>)

大宮遺跡の最初の環濠は弥生時代前期後半に埋没し、そのあと用水路とみられる濠が掘られている。亀山遺跡の環濠も同時期に埋没した。その要因は、外敵との戦争に敗れたことが窺われるが、その戦争の相手は弥生時代前期後半なので、時代が早すぎるため九州勢ではない。弥生時代前期後半に戦争があったのであるならば、それは吉備国による侵略であろう。この時期、吉備国は周辺諸国に侵入し、律令制のもとで「吉備国」とされる領域（現在の岡山県全域、広島県東部、香川県島嶼部および兵庫県西部）に近い範囲を征服したのだろう。また、これらの遺跡はこの敗戦以降環濠を持たない平時の村落として再生、存続しており、それ以後も大宮遺跡では古墳時代後期六世紀後半の掘立柱や建物がみつかり、集落はその形態を変えながら存続し続けたのである。つまり、この地域は九州勢の侵略を受けなかった可能性が高い。九州勢の東進の時期、この地域は吉備国の領域だったので、このことから言えることは、九州勢は吉備国との戦争を回避し、話し合いによる共存の道を選択した可能性が高い。

広島県北部の三次、庄原などは侵略されたような遺跡が見当たらない。この地方もすでに吉備の領域に含まれていたとみられる。

## 岡山県の遺跡の状況

大宮遺跡で述べたが、当時の吉備国は広島県東部から兵庫県西部にわたる大国であり、九州勢と戦争を行ったという遺跡や史料が見られない。

<sup>かどた</sup>門田貝塚は、岡山県瀬戸内市にある弥生時代から鎌倉時代までの大規模な集落遺跡であり、特に弥生時代の貝塚を伴う集落遺跡である。遺跡の中心部分は標高約 2.4mで、東西約 100m、南北約 50mの範囲に広がり、貝塚を始めとする弥生時代の前期の遺構や遺物が出土している。

中期になると住居跡が確認でき、竪穴式住居が営まれていたことがわかる。また、壺・瓶・製塩土器や石器・白玉が出土し、製塩が行われていたことが確認できる。そののちも、集落が廃絶することなく続き、古墳時代にかけても同様の生活様式が営まれていた。(参考資料：ウィキペディア「門田貝塚」)

岡山市南部を流れる人工河川、百間川流域の遺跡、百間川遺跡は、縄文時代の後・晩期に始まり、弥生時代の全期を通じ、古墳、奈良、平安時代、さらに中世に至るまでの遺跡がさまざまに複合して発掘されており、一時的に廃絶したような形跡がない。(参考資料：日本の古代遺跡 23 岡山 間壁忠彦 間壁葎子 保育社)

岡山県の遺跡の主なものについて紹介したが、高地性集落は臨海部の山上に多く見られ、瀬戸内海を航行する船舶の見張り所と思われるものであった。平地の遺跡は数百年にわたって集落が営まれ、戦争などで廃絶した様子がない。その後の九州勢と吉備国の関係も、例えば箸墓古墳の築造に際して現在の岡山市付近から運ばれたと推測できる特殊器台・特殊壺が後円部上に据えられるなど緊密・友好的な関係が築かれていた。九州勢はやみくもに中四国の国々を侵略していったのではない。『古事記』には「吉備の高島宮に八年坐しき」と書かれていて、九州勢と吉備国の良好な関係が窺われる。

## 兵庫県の遺跡の状況

兵庫県の瀬戸内海沿岸部には播磨国と淡路国がある。

神戸市明石川下流域の吉田遺跡と片山遺跡は、弥生時代の最も早い段階に、人々の営みが開始した集落である。次いで周辺の新方遺跡や玉津田中遺跡などの拠点集落が出現する。両遺跡ともに中核的な性格を持つ遺跡であり、盛衰はあるが中世に至るまで継続的に集落を営んでいる。新方遺跡は、前期の前半段階に成立し、微高地上で居住域、墓域が確認されている。中段階で遺構の数を増す。玉津田中遺跡は、前半段階に段丘上に集落を展開し、中段階に規模を減少させる。

前期後半段階から中期前半には、前時代からの集落は継続して発展する。新方遺跡では玉生産が始まり、生活域の拡大が見られる。玉津田中遺跡も最盛期を迎え、大規模な集落へ発展する。また、新たな集落の形成が見られ、沖積地上に今津遺跡、片山遺跡、出合遺跡等の分村的な集落が現れる。

中期後葉には集落形成に大きな変化が見られる。墓域を除く遺構が平野部から激減し、丘陵上に表山遺跡、頭高山遺跡、袋ヶ谷遺跡等の新たな高地性集落が展開する。当時期に形成された集落は、ほとんどが丘陵上に立地し、平野では周溝墓を主とする墓域が確認される場合が多い。

後期には、再び集落が平野部に戻るものが大半であるが、一部は丘陵上に集落を継続する集落もあり、池上回の池遺跡や高津橋大塚遺跡のように、新出する集落も存在する。(参考資料：新方遺跡野手西方地区発掘調査報告書1 山口英正、千種浩、中村大介 神戸市教育委員会)

豊中市の勝部遺跡からは弥生時代の前期、中期の遺物がみられるが、下って古墳時代以降のものも出土する。そのことは、弥生前期にはじまるこの集落が、中期末をもって一旦廃絶したことを示している。そして現在の勝部村と結ばれるものは、その後の古墳時代に入って新しくこの地に移住したものであることが明らかである。そこにははっきりと集落としての断層がある。

ところが、弥生中期をもって終わった集落の遺跡からは多数の石器が発見されたが、ことに第二号墓の人骨には5個の石鏃が伴出し、そのうちの2個は明らかに骨にささっていた。また、うしろ右方から投げられて身体に深く入り、腰骨のところととまっていた長さ16cmの石槍をもつ第三号墓も見つかっている。少なくともこの集落は弥生中期の終末ごろ、最後のはげしい戦闘で終わった感が深い。(参考資料：勝部遺跡 勝部遺跡発掘調査団 豊中市教育委員会)

六甲山地の北部の三田盆地にも弥生時代中期後半以降の高地性集落が多くみられる。下深田大山遺跡(比高差40m)、西山遺跡(比高差45m) 奈カリ与遺跡(比高差70m) などである。

西宮市の仁川五ヶ山遺跡は標高140mにあり、大阪湾を一望できる高地性集落で、弥生時代中期後半の住居跡が発掘されている。

六甲山南麓には多くの高地性集落が見られる。すでに【高地性集落】で紹介した会下山遺跡、伯母野山遺跡のほか、保久良神社遺跡、金鳥山遺跡、桜ヶ丘遺跡、桜ヶ丘B地点遺跡、荒神山遺跡などで、弥生時代中期後半に盛行するもの、中期後半に始まり後期に盛行するものがある。

(参考資料：日本の古代遺跡 3 兵庫南部 櫃本誠一 松下勝著 保育社)

淡路島の洲本平野では、弥生時代前期の遺跡は下加茂遺跡、武山遺跡、下内膳遺跡、波毛遺跡があり、中期前半は前期段階に営みを始めた集落等がそのまま継続する。中期後半になると遺跡分布は広がり、洲本川や千草川を遡って、ほぼ洲本川流域全体で展開されるようになる。波毛遺跡では堅穴住居跡等が発見されている。一方、先山南麓の尾根上にも集落が営まれ始め、大森谷遺跡、下加茂岡遺跡、寺中遺跡

等が存在している。これらの集落はいずれも極めて短期間の存在であり、後期前半には断絶する。

九州勢の侵攻を受けたと思われる後期前半の遺跡は、洲本平野全体に少なく、ほとんど見当たらないような状況になる。戦後、社会が落ち着いた後期後半には再び先山南麓の尾根上等に集落が営まれ、大森谷遺跡、寺中遺跡等のように、中期後半に集落が営まれた場所に戻ってくるような遺跡も存在している。

(参考資料：兵庫県文化財調査報告 第 351 冊 洲本市所在 下加茂遺跡Ⅱ 洲本川河川激甚災害対策特別緊急事業(巽川工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 兵庫県教育委員会)

このように、兵庫県では弥生時代中期後葉以降多くの集落が廃絶し、新たに高地性集落が丘陵上に出現する。これは、九州勢による侵略と、その後の近畿中央部の戦争が苛烈なものとなり、補給物資の収奪、兵員補給のための徴兵が厳しくなっていたことの影響が窺われよう。

九州勢の東進は、周防国、安芸国の征服後吉備国と和議を結び、兵庫県(播磨国、淡路国)へと侵攻したと考えられる。

### 淡路島の鉄器生産とその原料

淡路島には、それまで近畿地方に見られなかった鉄器の生産工房が発見された。五斗長垣内遺跡である。ここでは鉄鏃が見つかり、九州勢の侵攻後、高地性集落を築き、反抗のためにそこで生産を始めたのではないかと思っただが、長期にわたって鉄器製造がおこなわれており、そうではなく、近畿中央部の戦場への武器の供給拠点として九州勢によって設けられた可能性が高い。

五斗長垣内遺跡は、淡路市黒谷の海拔 150mにある弥生時代後期の国内最大規模の鉄器製造群落遺跡で、高地性集落である。2001年に発見され、2007年から発掘調査が実施された。

遺跡は淡路島の西側海岸線から 3kmの丘陵地にあり、東西 500m、南北 100m。弥生時代後期一世紀ごろのおよそ 100年間にわたり存在したと考えられる。

弥生時代後期の鉄器製造施設跡が 23棟から成っており、うち 12棟から鉄を加工した炉跡の遺構が確認された。建物から出てくる土器を基準にすると、鉄器づくりが始まると同時に、大型の建物が出現し、少しずつ移動しながら建物がつくられ続けた。つまり、発見された 23棟は同時期にそこにあった訳でなく、施設が更新されながら続いたということがわかった。遺物の鉄器は、鏃、鉄片、切断された鉄細片など 75点が出土した。また石槌や鉄床石、砥石など、鉄を加工するための石製工具も数多く出土した。1棟の中に 10基の鍛冶炉がある建物も発見され、これまで発見された弥生時代の鉄器製造遺跡としては、最大規模であった。住居は少なく、鉄器製作に特化した特異な遺跡であることが分かった。鉄鏃は製造されていたが鉄剣は見られない。しかし、三世紀には鉄器生産が終わった。(参考資料：ウィキペディア「五斗長垣内遺跡」、<https://kobacco.hpg.co.jp/3894/>)

淡路市舟木にある舟木遺跡は弥生後期の高地集落遺跡で、淡路島北部中央部の標高 160mほどの山間にある。弥生時代末期(二世紀中頃～三世紀初め)に存在したとみられ、1966年に発見された。面積は東西 500m、南北 800mの約 40万㎡。

2017年、淡路市の教育委員会が舟木遺跡を発掘調査し、新たに鉄器生産工房跡から鉄器 57点などが発見され、手工業品生産工房跡も見つかった。舟木遺跡は過去に淡路市黒谷で見つかった近畿最大の鉄器生産工房五斗長垣内遺跡を上回る国内最大規模の鉄器工房跡の可能性があり、今後も発掘調査が続けられる。五斗長垣内遺跡の鉄器生産が終わった後も、舟木遺跡では少し鉄器生産が続き、やがて終了する。出土した土器の年代から、工房があったのは二世紀後半とみられる。4棟の大型堅穴建物跡のうち、3棟は敷地が円形で直径が 10mを超える大型で、うち 1棟から 4基の炉の跡が確認された。柱が外側に寄り中央部が広いことから、作業をする空間だったと考えられる。また 4棟から鉄器製作に使った敲石など石器が多数出土し、鉄器は刀子(ナイフ)や細長い針状の鉄器、鉄を加工した際に出た鉄片などの鉄製品計 57点があった。鍛冶関連のほか小型工具も出土した。

五斗長垣内遺跡では、鉄鏃などの武器類が多く出土したが、舟木遺跡では武器以外の鉄製品が出土した。両遺跡は 6km離れており、ほぼ同じ時期の工房なので、製造する品種を分けていたのかもしれない。(参考資料：<http://enkieden.exblog.jp/23804663/>)

弥生期の淡路島をたどれば、南あわじ市で平成 27年 4月に見つかった松帆銅鐸は弥生時代前期～中期(紀元前三～前二世紀)、五斗長垣内遺跡は同後期(一世紀半ば～二世紀後半)、舟木遺跡は後期後半から終末期(二世紀半ば～三世紀初め)と時代が移っている。青銅器の銅鐸文化から鉄器文化への移行に伴

い、淡路島南部から北部へ、平野部から山間部へ移ったことが、今回の発見で改めて鮮明になった。その間に大きな社会的変化があったとみられている。

(参考資料：<http://www.sankei.com/west/news/170126/wst1701260028-n2.html>)

淡路島の鉄器製造は長期にわたっており、とても一つの、あるいは限られた地域の集落が独断で営めるような事業であったとは思えない。やはり、この地を征服した九州勢が近畿における鉄鑛、鉄器の供給基地として、管理・統制していたのではないかと考えられる。製造された鉄鑛は、九州勢が近畿勢との戦争中はその供給基地として、近畿中央部征服後は九州勢の都に運ばれ、山陰、東国などの戦場へ送られたのであろう。そして三世紀には和国統一戦争が徐々に終息に向かい、また、各地で製鉄が始まることにより、淡路島の鉄器製造の必要性が弱まり、生産を終了したのではなかろうか。

それでは、淡路島の鉄器の材料はどこからもたらされたのであろうか。当時、日本では製鉄が行われていない。広島県三原市の小丸遺跡で製鉄炉跡が発掘されたが、一世紀くらい後の三世紀のものとしてされている。(参考資料：<http://yamatai.cs.cide.com/katudou/kiroku202.htm>) 淡路島の西部の瀬戸内沿岸の遺跡からは鉄器や鉄素材などの発掘例がないことから、瀬戸内海を通じた取引によるとは考えられない。そのため、鉄の供給を担っていた北部九州からほとんどを直接調達していたと考えられる。

『古事記』、『日本書紀』のストーリーに基づいて遺跡の状況を見ているので、本来なら兵庫県に続いて大阪府の遺跡の状況を見るべきだが、その前に瀬戸内海の南側、四国について九州勢がどのように侵攻していったのか見てみたい。

## 愛媛県（伊予国）の遺跡の状況

愛媛県の弥生時代中期前半の遺跡は、低湿地中に立地するものがある反面、山麓端や河岸段丘端の低湿地を眼下にする場所に多くなり、中期以降になると人口増加に伴う農耕地の拡大によって、台地上などにも立地する傾向がよくなる。代表的な遺跡としては、東予地方では新居浜市<sup>ひのきのはな</sup>檜端、小松町新屋敷、今治市<sup>なかでら</sup>中寺、<sup>ほかたちょうかのうら</sup>伯方町叶浦、中予地方では北条市<sup>ひさこ</sup>稗佐古、松山市文京Ⅲ・久米窪田Ⅱ・土居窪<sup>とべちよう</sup>、砥部町<sup>みつまた</sup>水満田、南予地方では大洲市都、八幡浜市徳雲坊などの各遺跡がある。

中期中葉以降になると、松山市の文京Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡で代表されるように、低地に大集落が形成されるようになる。他方、西野Ⅲ遺跡のような台地上では4~5棟の住居跡に1~2棟の倉庫跡を持つ集落が形成されている。住居跡の配置は台地端に円形状に分布している。この時期になると鉄器が使用されるようになるとともに、石包丁の出土が急増する。中期中葉以前は磨製石包丁がほとんどであるが、中葉以降になると打製石包丁が中心になる。それも大半が緑色片岩製であって、他地域とは大きく相違している。

中期後半になると、山頂に立地する高地性遺跡が瀬戸内海沿岸に多現するようになる。その代表的遺跡が伊予三島市丸山、西条市八堂山（既出）、生名村立石山、伯方町大深山、吉海町八幡山、北条市<sup>ぎようどうさん</sup>椋ノ原山、伊予市<sup>ぎようどうさん</sup>行道山などである。これらの遺跡は一時期に3~4棟の住居跡があることから、大きな集落とはいえ、見張りや通信的機能を有する烽台的なものに利用したとみるべきであろう。

この時期には臨海性の遺跡も多現する。特に燧灘中に浮かぶ魚島・高井神島や伊予灘中に浮かぶ由利島、さらに、芸予諸島や忽那諸島の汐線近くに所在する多くの遺跡は、瀬戸内海の海上交通を考えなければ、その立地要因が理解できないものである。

後期になると中期の遺跡立地を踏襲しながら、水田には利用しにくい乏水地帯である河岸段丘にまで遺跡が立地するようになる。特に松山市土壇原<sup>どんだばら</sup>においては、段丘端に30棟以上の集落が、その西方200m離れた場所には、80基をこえる土壇墓からなる共同墓地が形成されている。他方、中期に多かった芸予諸島や忽那諸島の遺跡の数が極端に減じている。

(参考資料：<http://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/68/view/8528>)

このように弥生時代の愛媛県は、水稻栽培が盛んで耕地も低湿地、台地上、河岸段丘上へとしだいに広がっていき、それとともに人口も増えていったのであろうが、戦争があったと思われる遺跡もあるので紹介する。

<sup>いわいだにはたけなか</sup>祝谷畑中遺跡は松山市の北東部に位置している。弥生時代中期、祝谷には平形銅剣が発見された祝谷六丁場遺跡をはじめ、数多くの遺跡が営まれていた。祝谷から南へ下った道後城北地区は、弥生時代後期



の超巨大集落である文京遺跡や弥生時代前期末の環濠集落である岩崎遺跡などがある。

平成 12 年から 13 年にかけて行われた発掘調査の結果、祝谷畑中遺跡は常信寺山から祝谷へ向かって延びる尾根先端部の、周囲より一段高い場所につくられたムラであることがわかった。

調査ではいくつかの重要な発見があった。ひとつは大溝の発見で、この大溝は幅が 10m 以上、深さは 3m 以上もあり、断面が V 字形をした環濠である。この環濠は、弥生時代の環濠としては日本でも最大級の規模を誇るものである。

祝谷畑中遺跡は弥生時代中期前半においては、道後城北地区のなかでも抜きん出た大きさの集落であったと考えられるが、中期中頃までに環濠が埋め戻され、中期後半になると、集落が突然放棄され、遺跡のほとんどが消えてしまう。祝谷から遺跡がなくなるのと入れ替わるように、道後城北地区の真ん中に巨大な文京遺跡が登場する

(参考資料：[http://www.ehime-maibun.or.jp/fukyukeihatsu/Web\\_koukokan/d\\_YAYOI/iwaidanihatanaka/em\\_mus\\_iwaidanihatanaka.html](http://www.ehime-maibun.or.jp/fukyukeihatsu/Web_koukokan/d_YAYOI/iwaidanihatanaka/em_mus_iwaidanihatanaka.html))

愛媛大学城北キャンパスに広がる文京遺跡では、弥生時代中頃（一世紀）と、古墳時代の集落、古代～中世にかけての水田跡などが見つかっている。とくに、弥生時代には大量の土器や石器に加えて、中国製の青銅鏡破片、鉄製の斧や鋸、石製の指輪などの遺物が出土し、土器やガラス装身具などが作られていたことがわかっている。また、法文学部本館西側付近では、東西 8.5～9m×南北 9.5m 以上、柱直径 40cm の超大型建物群が発見された。周辺には 100 軒をこす住居跡や、貯蔵用の穴蔵、高床式の倉庫が幾重にも重なり合った状態で見つかっている。こうした弥生時代の文京遺跡は、「弥生都市」とも呼べる大集落であり、全国でも例をみない、貴重な遺跡として注目されている。(参考資料：<http://maibun.adm.ehime-u.ac.jp/isekimatome/bunkyo.html>)

祝谷畑中遺跡の廃絶の原因となった戦争の相手がどのような勢力だったのかわからないが、弥生時代中期中頃までに環濠が埋め戻されているので、九州勢の侵攻というよりは伊予国が統一されていく過程で行われた戦いの可能性が高い。そして文京遺跡が伊予国の都として築かれていったのではなかろうか。

伊予国の遺跡の状況を歴史を追ってみてみると、九州勢に侵略されたと思われる社会の変化、集落の廃絶、高地性集落の発生などが見られない。また、銅鐸の埋納については、四国中央市の<sup>かみぶん</sup>上分西遺跡で 2010 年につり手部分が見つかっているが、他には発掘例がない。(参考資料：<http://doutaku.cocolog-nifty.com/blog/2010/08/post-2e46.html>) 伊予国が銅鐸文化圏外であった可能性もあり、銅鐸埋納の有無で九州勢の侵攻は判断できない。おそらく、吉備国と同様に戦火を交えることなく話し合いが行われ、九州勢に従う道を選んだのではなかろうか。

## 香川県の遺跡の状況

さぬき市の弥生時代の遺跡を見ると、弥生時代前期は不明瞭である。寒川町神崎遺跡で前期後半の壺形土器の表採資料があげられる程度である。弥生時代中期では、寒川町菘神遺跡で中期末の土器とともに環濠と考えられる三条の溝を検出した。寒川町極楽寺遺跡、石田神社遺跡、天王山遺跡等はいずれも高所に位置する高地性遺跡に属する遺跡と考えられている。弥生時代後期になれば遺跡数は増大する。後期初頭では高地性集落で寒川町のズバ山遺跡がある。後期後半では、後期～古墳時代にかけての拠点集落である森広遺跡群があり、その遺跡は県道高松長尾大内線の沿いに分布しており、西から布勢遺跡、森広天神遺跡、石田高校校庭遺跡、加藤遺跡など東西約 1.5 km の範囲に広がる。森広天神遺跡から巴型銅器 8 点、加藤遺跡から扇平紐式袷袢裡文銅鐸片 7 点等青銅器を多種・多様に発掘している。これらの中で注目されるものに、7 点の銅鐸片がある。銅鐸は全国で 440 余発見されているが、破壊・埋納の時期を、土器との相伴関係から確認できる、たった 5 例のうちの 1 例という珍しいものである。(参考資料：県道富田西志度線道路改良事業及び県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 寺田・産宮通遺跡 南天枝遺跡 香川県教育委員会 (財) 香川県埋蔵文化財調査センター)

坂出市河津町から国道 111 号線坂出・丸亀バイパスに入り東へ進むとすぐに金山と城山にはさまれた峠があり、トンネルが設けられている。金山から派生し、トンネルの高松寄り出口の北側に張り出した尾根上に、長者原遺跡がある。この遺跡は標高 100m 前後の地点に立地しているため、高地性集落としてとらえられている。

三豊平野には縄文時代から古墳時代に至る多数の遺跡が分布している。しかしながら、縄文、弥生時代

の遺跡は遺物のみが単独で出土する例がほとんどであり、顕著な遺構は少ない。香川県において縄文、弥生の両文化が最も早く展開されたのがこの地域であったにもかかわらず、その実態はなお不明な点が多い。(参考資料：日本の古代遺跡8 香川 廣瀬常雄 保育社)

以上のように、香川県(讃岐国)の遺跡には、環濠の埋め戻しとか集落の廃絶、それに関連した高地性集落の発生など、九州勢の侵攻に敗れたとみられる遺跡が見られない。しかしながら、銅鐸の破壊と埋納や弥生時代後期に高地性集落のズバ山遺跡が発生するなど、この時期に九州勢に襲われたと思われる状況証拠的事象は少数だが見て取れる。

瀬戸内海に面する香川県三豊市詫間町の紫雲出山遺跡(既述)も西方からの外敵に備えて設けられた高地性集落であり、はっきりとした証拠が見られないので断定は難しいが、讃岐国は兵庫県への進出と相前後して弥生時代中期後半に沿海部が九州勢の攻撃を受け、弥生時代後期以降内陸部を含めて九州勢に敗れ、支配されたのではないかと思われる。

## 徳島県の遺跡の状況

徳島県では、九州勢の侵入を受けたと思われる遺跡が複数見られる。環濠が埋没して廃絶した南庄遺跡や高地性集落である。

### 南庄遺跡

南庄遺跡は徳島市のシンボリックな山である眉山の北麓に営まれた弥生時代以降の複合遺跡である庄遺跡に南接し、鮎喰川などによって形成された沖積地上に立地している。弥生時代前期後半に完成した集落として形成され、古墳時代初頭まで継続型の母村として存続していたようである。

南庄遺跡に初めて人々が本格的に居住したのは、弥生時代の前期中頃で河道や旧河道が埋没してできた湿地帯に区切られた微高地上から、たくさんの土坑や濠が検出されている。

弥生時代中、後期になると、東に迂回する弥生河川の内側に、低湿地を挟んで二つの居住域が形成され、あわせて19軒の円形の竪穴住居跡が発見された。

弥生時代中期以降には、弥生河川の西側は水田として使われたと考えられる。

弥生時代後期後半になると、南庄の弥生集落は終焉を迎える。弥生時代の河川より東側地域が再び居住域になるのは、平安時代以降のことである。

南庄遺跡では、幅約6.5m、深さ1.2mの集落を囲む環濠の可能性のある遺構も検出されており、外側に土塁が築かれていたことが窺われる。弥生時代前期中頃に掘られ、中期初頭には埋没している。(参考資料：図説徳島県の歴史 三好昭一郎 高橋啓 河出書房新社)

このことから、南庄遺跡は弥生時代中期初頭に、おそらく阿波国を統一した勢力の攻撃を受けて環濠を埋められ、後期後半(三世紀)に九州勢の侵攻に敗れ廃絶したとみられる。廃絶の時期は卑弥呼が邪馬臺国の女王だった時代である。

### 徳島県の高地性集落

徳島県では一定の比高差を有して高位に立地する集落がある。これらは日常的様相をみせる高位台地性集落(山住みの集落)と軍事的防御的機能をもった、いわゆる高地性集落の二者が展開する。いずれも集落の継続期間は土器一形式程度の短期間の居住である。吉野川流域では弥生時代中期中葉から後葉と後期初頭の二時期、吉野川に面した交通の要衝に高地性集落が出現する。

吉野川北岸中下流域には高位台地性集落が多く形成されている。第一次出現期の集落(三野町丸山遺跡・阿波町桜ノ岡遺跡・日吉谷遺跡・西長峰遺跡など)は高所立地をするが、防御機能を欠くものも多く、自然要因を含めた出現契機が考えられる。また平地における集落の実態が不明であるが、これらの集落は高地に立地するものの、周辺の台地上にはほぼ同時期に併存して連続して集落が形成・展開している。これらの集落は、弥生時代中期初頭に出現し、中期後半には遺跡数が増加し、後期初頭まで継続しており、また、台地単位で集落の移動や並存が確認できる。こうした状況からみれば、高地に立地することは普通の居住環境であるといえる。これらは平地から一定の比高差を有するが、出土遺構・遺物からは軍事的側面を積極的に指摘することはできない。

これに対して、弥生時代後期初頭、第二次出現期の集落(三野町大谷尻遺跡・鳴門市カネガ谷遺跡)は

環塚や段状遺構の掘削など大規模な土地改変を伴い、防御的機能が顕著に現れていることが指摘できる。このことは大形の石鏃や石製・土製投弾などの武器が多く出土していることから窺われる。この時期、強力な外敵に襲われ、第二次出現期の高地性集落が築かれたが、瀬戸内西部の山口県の防御的機能を持つ高地性集落は弥生時代中期後半から築かれており、百年近く遅れて出現している。これは、九州勢の徳島までの東進にそれだけの長い年数を要したことを示している。

## 高知県の遺跡の状況

高知平野に位置する田村遺跡群は、縄文時代後期から中世まで続く遺跡で、弥生時代中期には西日本屈指の大集落になった。弥生時代中期後半からの約 100 年間につくられた約 450 棟の竪穴住居、約 400 棟の掘立柱建物の計約 850 棟が確認された。

弥生時代前期の村は竪穴住居跡 10 棟と掘立柱建物跡 15 棟からなり、弧を描くように並んでいた。村はその後西見当へ移動し、環濠集落が営まれる。環濠は二重または三重になっていることが確認された。

弥生時代前期後半から中期前半にかけての集落は北側に移動し、中期後半から後期前半にかけて再び南下した。この時期の竪穴住居跡は約 300 棟ほどであり、田村遺跡群の最盛期にあたる時期となった。

後期後半になると、突然竪穴住居跡や掘立柱建物跡がなくなり、集落は完全に廃絶した。その後、古墳時代以降、人々の暮らした跡はなくなるが、古代になると立派な建物跡が発見された。(参考資料：日本の古代遺跡 39 高知 岡本健児 保育社)

田村遺跡群の廃絶と並行して、長岡台地上に小集落が散在するようになる。田村遺跡廃絶前から存在していた小籠遺跡(南国市岡豊町)のほか、ヒビノキ遺跡(香美市)、林田遺跡(香美市)、東崎遺跡(南国市東崎)、三島遺跡(南国市三島)、五軒屋敷遺跡(南国市後免)などは、田村遺跡の解体後に盛期を迎える遺跡である。これらの小集落に共通する特色として、鉄器の保有と畿内系土器の存在が挙げられ、畿内勢力の浸透、畿内との結合の深化という動向が窺われる。とくに、ヒビノキ遺跡周辺は香長平野のあらたな中心地となり、次の古墳時代において、大きな墳墓を築造しうる条件を整えていった。(参考資料：高知県の歴史 荻慎一郎 森公章 市村高男 下村公彦 田村安興著 山川出版社)

田村遺跡群の廃絶は徳島県の南庄遺跡の廃絶と連続したものと考えられる。卑弥呼が統治した女王国は阿波国(徳島県)を征服した後土佐国(高知県)に侵攻した。ちなみに、『魏志倭人伝』の女王国の領域について書かれた女王国の境界にある国々21カ国の中の「伊邪国」を、私は徳島県の現在の祖谷溪あたりではないかと第一章で書いたが、『魏志倭人伝』の記述と遺跡の状況を時系列で照合すると、女王国は近畿中央部を制圧した後、弥生時代後期後半、四国東部の阿波国を攻め、西進して四国中央部の祖谷溪あたりまでを三世紀初めまでに支配した。その後、または並行して、四国を南下して土佐国を攻めたのではなかろうか。

九州勢が東征したかどうかについては、直接的な戦争遺跡などが見られず、これら紹介した遺跡の状況から読み解くほかない。近隣諸国間の戦争の可能性も排除できないが、弥生時代中期から後期にかけて、瀬戸内中西部に高地性集落が出現し、後期には近畿地方で環濠集落の破壊と近隣の高地への集落の移転が多くみられるということは、強力な武装勢力による侵攻が時を追って瀬戸内西部から東部へと行われていったことを如実に示していると言えよう。そして四国については、島嶼部は瀬戸内海を東進する過程で勢力下におき、本土部分は近畿中央部の征服後本格的に攻略したのではなかろうか。